

教師の児童認知の多様性が児童の級友関係に及ぼす影響

学校教育専攻 発達臨床コース

笠松 幹生

(押水町立押水第一小学校)

1 問題と目的

近年、児童生徒の不登校の要因として、教師との関係をめぐる問題が指摘されている(文部科学省, 2001)。岸田(1987)は、教師と子どもとの人間関係の充実が課題であるとし、学級での教師の指導行動・子どもへの働きかけを指摘する。学級における教師の子どもに対する働きかけは、教師が彼らをどう見るかという認知の仕方に大きく規定されている(蘭, 1988)。教師が子どもをどのように認知するかは、子どもに対する働きかけを左右し、子どもの人格形成や学業成績などにも大きな影響を及ぼす。

そこで、本研究では、教師の児童認知の多様性に着目した。また、教師の児童認知は学校場面が変わることで、認知も異なると考え、場面ごとの測定を試みた。そして、児童認知の多様性と児童の級友関係、適応感との関連を検討することを目的とした。

2 児童認知測定尺度の作成

教師一般の、異なる学校場面ごとの児童を捉える認知次元を測る目的で児童認知測定尺度が作成された。小学校高学年学級担任が児童を捉える際に使う視点を 61 個収集し、これを使用して、小学校高学年学級担任教師 17 名に調査を実施した。これを主成分分析(バリマックス回転)した結果、児童を捉える認知次元は 10 カテゴリー抽出された。さらに、各カテゴリーから 2 項目ずつを選択し、計 20 項目からなる児童認知測定尺度を作成した。

3 研究 教師の児童認知多様性が児童の教師認知把握、級友認知、級友関係及び、学校・学級適応感に及ぼす影響

分析対象は、公立小学校 5・6 年生 592 名とその学級担任教師 23 名であった。教師の児童認知は、作成した児童認知測定尺度を用いて調査を行い、教師ごと場面ごとに主因子法バリマックス回転により児童を捉える視点(因子)が抽出された。その結果、教師により因子数に違いが見られた。また、場面が変わることで因子が異なる教師、場面が変わっても因子が変わらない教師の存在が確認された。一方、児童調査は、教師の認知が学級児童にどれだけ伝わっているかをみる「教師認知把握」尺度、児童の級友との関係性をみる「級友関係」尺度、適応感をみる「学校・学級適応感」尺度において、主因子法バリマックス回転を実施した。その結果「級友関係」尺度は、気持ちを共有するなどの「共感関係」と、活動を共にするなどの「かかわり関係」の 2 因子が、「学校・学級適応感」尺度は「学校適応感」と「学級適応感」の 2 因子が抽出された。また、級友をどう感じているかを問う「級友認知」尺度は、各児童が活躍している人として回答した級友の累積者数を、学級児童数で割ることで、児童個々の級友選択率を算出し、分析のために角変換を実行した。

教師の児童認知多様性は、因子の性質数の多少から、因子数が多い教師は多様性高群、少ない教師は多様性低群と群分けされた。その結果、高群、低群の学級比は 10 学級：13 学級であり、その学級児童数比は 247 人：345 人であった。この群分

けのもと一要因2水準の分散分析が行われた結果、「教師認知把握」「級友認知」「級友関係」「学校・学級適応感」全ての尺度において、児童認知多様性高群の方が低群よりも有意に得点が高かった。これより、教師が多様な児童認知をしている学級では、児童は教師の認知を多様であると把握しており、児童同士も教師同様の多様な級友認知をしていること、そしてより共感し合い、かかわり合う級友関係であり、学校・学級の適応感の高いことが明らかとなった。

また、教師内地位指数や子ども認知図を使用した分析からは、体育・音楽・図画工作・家庭授業場面及び特別活動場面における教師の多様な児童認知の重要性が示された。つまり、より多くの児童を別個の異なる存在と捉え、認めていく児童認知が、児童のかかわり合い共感し合う級友関係成立や、学校及び学級適応感の高まりにより影響を及ぼすことが分かった。

4 研究 教師の児童認知多様性による、児童の教師認知把握と、級友認知、級友関係、学校・学級適応感の因果関係

研究において群分けされた教師の児童認知多様性高・低群を分析対象とし、統計処理「AMOS」によりパス解析が実施された。

その結果、認知多様性高群の学級では、「教師認知把握」が「級友認知」及び両級友関係に影響を及ぼしており、「級友認知」は「かかわり関係」に、「かかわり関係」は「共感関係」に影響を及ぼしていた。また、両級友関係因子は「学級適応感」に影響を与えていることが分かった。これより、児童は教師と同じような多様な級友認知を行うことで、よりかかわり合う関係を構築していた。さらに、かかわり合うことで互いに共感し合え、学級の適応感を高めていることが明らかとなった。一方、認知多様性低群の学

級では、教師の児童認知を多様ではないと思うほど、級友との関係は、互いに共感することもかわり合うことも少なく、学校や学級に不適応感を抱いていることが示された。また、児童たちが独自に行っている級友認知は、より多くの級友の頑張りや活躍を認めると、児童の共感関係を強め、それがかわり合う関係をつくっていることが分かった。これより、低群の学級児童は、互いに共感し合えて初めてかわり合う関係、言い換えれば共感した級友としかかわり合えない関係であると推察された。互いに認め合う級友はごく限られた仲良しが中心であり、学級全体に級友認知は及んでいないことも考えられた。共感し合う級友関係が学級に対する適応感に影響を及ぼさない点で、低群には高群とは異なる級友関係と適応行動の仕組みが認められた。

5 全体的考察と今後の課題

教師の多様な児童認知を、学級児童は把握していた。それが、児童同士の級友認知に影響を及ぼし、学級児童も教師同様の多様な級友認知をしていた。また、多様な級友認知は、児童のかかわり合い共感し合う級友関係をつくり、学校・学級適応感を高めていた。特に体育・音楽・図画工作・家庭授業場面や特別活動場面における教師の多様な児童認知の重要性が示された。この時の児童認知の多様性は、因子数の多さのみならず、因子の中に児童を捉える視点が価値的に等価なものを含んでいること、そして児童一人一人を別個の異なる存在として捉え、個々のよさを肯定的に認めていくことが重要であることが明らかとなった。

今後は、得られた結果についての教師に対するフィードバック方法が課題である。